

造形表現領域指導法に関する一考察

——苦手を克服する授業づくり——

清 見 嘉 文*

A Study on the Modeling Expression Area Teaching Method

—— Creating Lessons to Overcome Weaknesses ——

Yoshifumi SEIMI

Key words：幼稚園教育要領 The National Curriculum Standard for Kindergarten,
造形表現 Modeling expression, 苦手意識 Awareness of weakness

I はじめに

「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」は、幼稚園教育要領の「ねらい及び内容」の「表現」領域の冒頭に示された文章である。これは、幼稚園教育において育みたい3つの資質・能力に向けて、10項目にわたり示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の1つである「(10) 豊かな感性と表現」の項目において、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の方法などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」を実現するために示された内容である。

この内容を、図1のように図式化して示すと、保育を学ぶ学生にも理解しやすくなる。

この内容からとらえられる表現の領域における最終目標は、創造性を豊かにすることにある。この目標及び内容の中で注目したいことは、表現の起点となる「感じたこと」「考えたこと」の主体はいずれも表現者である子どもであり、その表現の方法である「自分なりに」の主体も、やはり子ども自身である。子ども自らが「感じ・考えた」ことを「自分なりに」に表現することを通して、子どもの「豊かな感性」と「表現する力」を養うのである。この、極めて当たり前のことを幼児教育の現場で実現していくことが、表現領域における指導上の課題と言えよう。幼稚園の保育室や廊下に設置された掲示板には、よく指導された子どもの作品が並べ掲示されている。しかし、全体を見ると、あまりにも指導が強すぎるのではないかと思える作品が並んでいることがある。そこに表されているのは「子ども自身が感じ・考えたこと」の表れとは言い難く、指導者の指導性ばかりが際立っている。更には、子どもの表現を十分に受け止めることなく、例

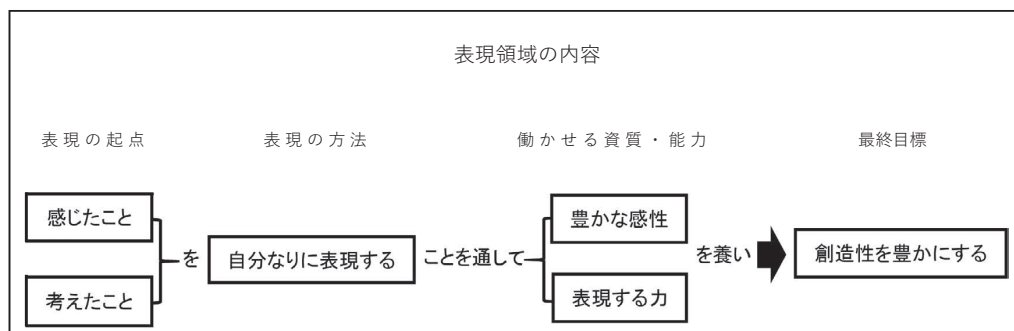


図1

* 広島文化学園短期大学保育学科

えば即刻やり直しを命じるなどの行為に至っては、子どもの表現というよりも子どもの手を借りた指導者の表現と言わざるを得ない。こうした表現の課題は、冒頭の表現領域において願う子どもの姿の理解の不十分さによるものと考えられる。またそれは、指導者自身が表現の喜びを十分に味わうことなく成長し、指導者としての職を得たことによるものではないかとも考えている。

本稿では、そうした課題の生じる起点にあると思われる、幼児教育・保育を学ぶ学生の造形表現に対する「苦手意識」に着目し、その克服を目指す指導のあり方について、実践を通して考察した。

Ⅱ 造形表現に対する学生の苦手意識

図2は、小学校・中学校時代に抱いた、学生の「図画工作・美術」に対する苦手意識を年度別に表したものである。

この調査は、入学後、第1回目の図画工作Ⅰの授業に出席した1年生（約100名）を対象に、アンケート形式により毎年行っている。初めの「小学校の図画工作、中学校の美術は好きでしたか」という質問に対しては、「好き」「嫌い」「どちらでもない」の3択で回答することと

した。

これによると、入学年度によって違いはあるものの、毎年約20～30%の学生が「嫌い」と答えている。保育者を目指すためには避けて通れない内容であるとの認識があるだけに、苦手意識を抱く自分に対する大きな不安感を抱えての大学生活のスタートとなっている。中には、単なる苦手意識を超え、恐怖感のあまり体が固まってまったく表現活動に向かうことさえできない学生も見られる。

嫌いになった時期を問う質問では、図3に示すように小学校時代が最も多い。

生まれながらの表現欲求に基づいて造形表現活動が行われると言われる¹⁾ 小学校の時期に何らかの表現への抵抗感を抱き、18歳に至る大学入学の時期までその意識を払拭できないでいることが見て取れる。専門的な内容の指導が一層進む中学校よりも、受容的な指導姿勢が重視される小学校の時期におけるこの状況には驚きを禁じ得ない。小学校図画工作科の指導の在り方について、改めて真摯に見直しを進める必要がある。

嫌いになったきっかけは、図4で示すように「下手だから」「他者にけなされたから」「発想がわからないから」

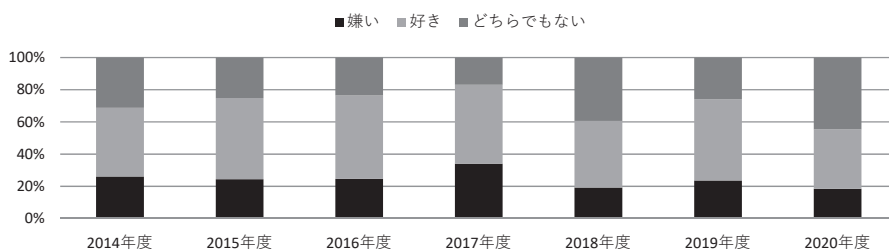


図2

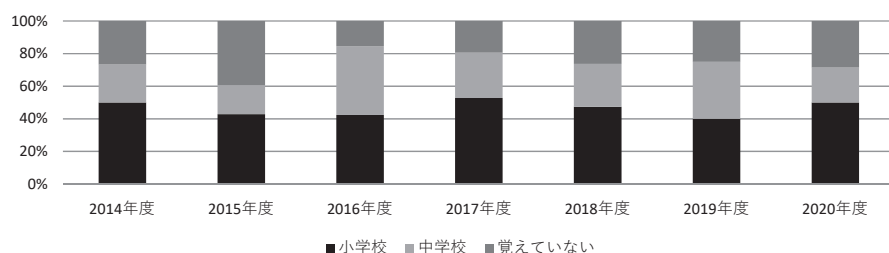


図3

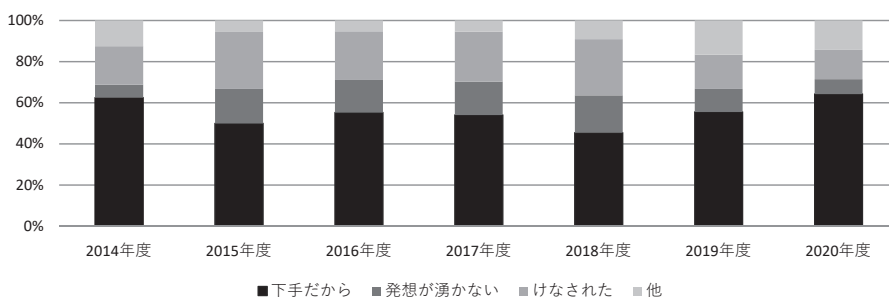


図4

の順となっている。

この結果から、造形表現活動を嫌いになった学生の多くが、自らの表現を「下手」と思っていることが窺える。学生の自由記述の欄を見ると、この意識は主に他者の作品と比較することにより生じていることが分かる。自分の表現を客観的にとらえて見始める小学校高学年時に、他者と自らの作品を比較して感じた違和感を「下手」ととらえた回答が多く見られた。また、他者から下手だとけなされたからという回答もかなりの数見受けられた。少年期における仲間の発言が及ぼす心理的影響の大きさが見て取れるが、そればかりか「教師にけなされた」との声が少なくないことは見過ごすことのできない問題である。我が国の近代教育が明治時代に発足して以来、第二次世界大戦後に繰り返し行われた教育改革はその都度テーマは異なる。しかし、近年に近づくに連れ「学習者主体」の教育理念・方法が打ち出され推奨されてきたにもかかわらず、かつての教師主導の教育が変わらず行われていることを窺わせるものである。

Ⅲ 「苦手意識」に対応した授業の試み

学生が「苦手意識」を抱えるに至ったのは、学生自身の責任とは言えず、学生を取り巻く様々な環境によって生じさせられてしまった結果と考えられるのではないかと。筆者の脳裏には常に、子どもが1歳になるかならないかの頃によく筆記具を握れるようになり、偶然に生み出された点や線を見て、自ら形を生み出すことのできた我が子の行為が誇らしく嬉しくてたまらなかった若い両親の姿が脳裏にある。こうした子どもの行為は、子どもを取り巻く人々に無条件に受け止められていたはずである。それがいつしか、大人の目に映る映像の写実的な再現が望ましい表現の方向とみなされ、子どもの発するすべてを丸ごと受け止める環境が失われていったのは、我が国の風土や学校教育と無縁ではないだろう。

こうした反省に立ち、学生の入学後半年間の1年生前期においては、造形表現に対する知識や技術・技法を学ぶとともに、自らの心を開き、自己表現を行うことに対する萎縮感から解き放つことを目的に授業を構成した。それによって、苦手意識の克服を目指そうとするものである。

指導に当たっては、以下の3点の内容をポイントとして押さえ、繰り返し学生に伝えていった。

① とにかく手を動かしてみよう。

生まれた点や線は、あなた自身が生み出した世界に一つだけの形である。うまく描こうなどという考えを頭から追い出し、思いのままに手を動かしてみよう。

② 失敗を恐れるな。

失敗することは恐ろしい。身がすくむような心持になるだろう。しかし、表現に失敗はない。ある

のは失敗ではなく、多様性である。これまでの経験において失敗と感じてしまったのは、それを失敗と感じさせた環境のせいであり、あなたの責任ではない。この部屋では、勇気をもって自己を出してみよう。

③ 人と比較せず、自分らしさを大切にしよう。

自分や友達の表現を上手いか下手かで捉えるのではなく、この作者は何を伝えたいのかなと考えながら鑑賞しよう。そうすると、誰の表現からもきっと学ぶべきところが見えてくる。

その意図は、表現活動を行う中で以下のような心情の変化を繰り返し経験することにある。

- ① 自分にもできるかもしれない、とりあえず手を動かしてみようか。
- ② 手を動かしているうちに、これなら何とかできるかもしれないと思うようになる。
- ③ いつしか夢中になって、自己の世界にのめり込んでいく。
- ④ 結果として何らかの活動の軌跡が残り、やり終えたことの安心感や充実感を覚える。
- ⑤ 出来た喜びは、次の活動に対する期待感の芽生えにつながっていく。

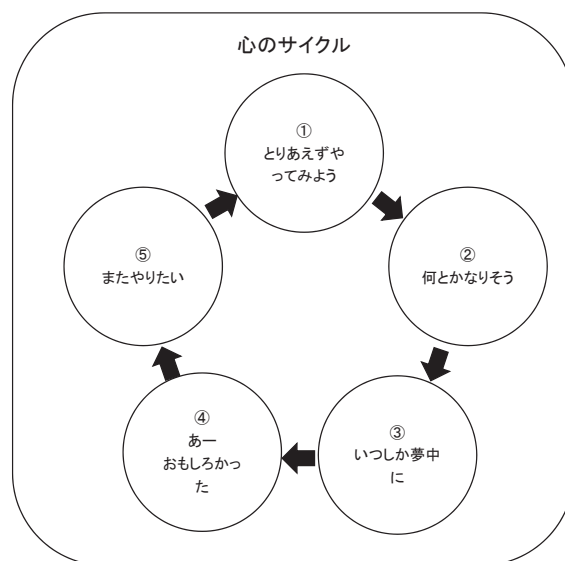


図5

このような心のサイクルを、繰り返し体験することで表現への抵抗感を軽減させていきたいと考えた。

こうした目的のもと、取り上げたいいくつかの題材を振り返り、苦手克服の観点から考察を加えた。

1 題材1 「マイキャラクター」

～形に命を吹き込もう～

学生へのアンケート調査によると、苦手意識の原因の

多くは「絵が描けない」又は「絵が下手」ということになった。

多くの学生が図画工作・美術を嫌いと感じるようになったのは、既に述べたように小学校時代が多い。学生が小学校時代を過ごした時期の図画工作科の授業時数を当時の学校教育法施行規則別表2によると、図画工作の時間は第1学年では年間68時間（2時間／週）、第2学年では年間70時間（2時間／週）、第3・4学年では年間60時間（約1.7時間／週）、第5・6学年では年間50時間（約1.4時間／週）が設定されている。更に、その時間に行う学習内容は「表現」と「鑑賞」に2分され、「表現」は「材料を基にした造形遊び」と「絵や立体、工作に表す」の2つの活動が示されている。この学習領域及び項目に充てる時間数の細かな設定はされず、各学校の裁量に任されている。かつて教育行政及び学校現場に籍を置いていた筆者の経験からすると、多くの学校においては、およそ半分の時間数が「絵や立体に表す」ことに充てられていることが推察される。結果的に、多くの絵を描く時間に「描けない」と感じた学生は、その思いが毎時間の繰り返しにより増幅されていったことが想像できる。その中で学生は、うまく描かなければならないといった自己脅迫の思いが強化され、思いのままに手を動かすことの喜びが失われていったのではない。

こうしたことから、あえて描くことに焦点を当て、身近にある単純な形に着目することで、描く抵抗感を減らし、わずかなりとも絵に表す楽しさを感じさせたいと考え設定した題材である。

(1) 学習過程

ア 形みつけ

～身近な形から思いついて～

- ① 例示を見て、身近な持ち物から思いついてすぐに描くことのできる単純な形（一筆描きで捉えることのできるような形）を1つ選び、試し紙に描く。
例）えんぴつ、消しゴム、ものさし、ノート、はさみ、玉じゃくし、包丁、スマートフォン など
- ② 描いた形に、目を描き入れる。必要があれば、口や鼻も描き加える。そうすることによって、無表情であった形に命を感じられるようになる。ここで、幼児の発達上の特徴であるアミニズムについての解説を加える。更に、描き入れた目や口の形を変えれば、笑いや怒りなどの様々な感情を込めた表現を簡単につくりだすことができることに気付かせる。
- ③ 命の吹き込まれた形に手や足を付け加える。ここでは、幼児期の絵画表現の特徴である「頭足人」について解説する。学生は、幼児の発達に触れることで自らが幼児になった思いを感じ、徐々に表すことへの抵抗感を減じていく。更に、描いた手足の線の方向や曲がり具合によって、動きが生まれることにも気付かせる。

- ④ 1つの形に命を見出すことができたなら、次は様々な形を見つけ、それに命を吹き込んでいくようにする。よりよい表現はすぐに生まれるものではなく、多くの形を生み出すことによって気に入った表現が見つかるとの声掛けを励みにどんどん描き進める。

イ 形みつけからの発展

～表紙絵「○○君の大冒険」～

- ① 多数描いた命を吹き込んだ形の中からお気に入り1つを選び出し、物語の主人公とする。その形に名前を付け、住んでいるところや好きな食べ物などを考え、性格付けをしていく。
- ② その主人公が、どこかへ出かけて行って冒険することをテーマにした表紙絵を作製する。多くの吹き込んだ命ある形は、その他の登場人物として表紙を飾ることもできる。自らの手を動かして作り出した形であるためか、比較的容易に発想しながら描き進めていく。思いつかない場合は、自作のタイトルを絵文字的に描きながら、更に想を膨らませていく。
- ③ 色鉛筆やカラーペンなどを使って彩色し、仕上げる。

ウ 鑑賞会

- ① 仕上げたすべての作品を画像に残し、スライド上映による鑑賞会を行う。
- ② 鑑賞しながら、全作品の「よい点」を見つけて解説する。ともすれば「上手い・下手」という狭い価値観により、更に「他者との比較」によってのみ判断していた学生の作品の捉え方を揺さぶりたいと考えた。また、他者の表現の中から自分にはないものを感じ取らせることで、狭い価値観を広げさせたいとも考えた。このことは、今後の学習において作品を鑑賞する際の基本的な姿勢を身に付けることにもつながる。決して批評するのではなく、よさをとらえる視点を大切に伝えることを体感させていく。

(2) 考察

全クラスの作品を鑑賞したため、自分の作品のある自クラスの作品が照射されるときは、緊張感をもって見ている様子が感じられる。自分の作品の解説は、体を固くして聞いている。すべての作品の解説が終わると、安堵感が一気に広がる。

入学して初めての表現活動であったため、何をさせられるのだろう、果たして自分にできるのだろうかなどと緊張して臨んだ思いが、活動を終えての振り返りの文章に多数記されていた。その緊張感が、「自分にもできた、面白かった、何とかかなりそう、次は何をするのだろう」との思いに変わっていった様子も窺えた。

鑑賞後には、同じ形のものを描いても発想は皆違うこと、それぞれによさがあること、自分にはないものを他者の作品から感じ参考になったなどの感想が寄せられた。当初のねらいである、うまい下手で捉えなくてもよさそ



作品 1

うであること、それならば自分にもできそうという、苦手意識克服への第1段階のアプローチはまずまずの成功であったと言える。

2 題材2「技法体験1」

～クレヨンとクレパスの違いを知ろう～

クレヨンとクレパスは、幼児期の描画指導の際に必ず取り扱われる用具であり、幼児期の主たる描画材と言える。そのため、この2つの用具の特徴を踏まえた適切な指導が行われる力を身に付ける必要がある。この2つの用具に違いがあることなど考えたこともないという学生がほとんどであった。しかし、その違いを知らなければ、描画表現指導時に、子どもたちに表したい思いを思うように表せないという不自由さを感じさせ、失敗したと思わせてしまう恐れがある。保育者を目指すためには知っておくべき事項として、資料を通して知識を得るとともに、実際に両者を比較しながら扱うことを通して、その性質に応じた指導の理解を図ることとした。

(1) 学習課程

ア クレヨンとクレパスの違い²⁾を知る

- ① 「クレヨン」という名前は、18世紀頃には既に使われていたようである。正式には、19世紀後半フランスのクレヨンコンテ社が開発し「クレヨン」という名前を付けて売り出した。日本にやってきたのは大正6年(1917年)、国内生産は大正10年頃からであり、輸入当初はとても高価であったが、国内生産によって安く身近なものになり普及していった。大正14年には小学校1年の教材として当時の文部省が推奨し、一気に全国に普及・浸透していった。
- ② 大正14年に、櫻クレヨン商会(現在の㈱サクラクレパス)という会社が、クレヨンをもっと使いや

すくと改良して作った。したがって、「クレパス」という名前はサクラクレパスの登録商標である。一般名称は「オイルパステル」という。

- ③ 成分は、どちらも溶かした蠟(ろう)、オイル、色の粉(顔料)とほぼ同じで、違いはそれぞれの成分量である。
- ④ クレヨンは蠟が多く使われており、硬く折れにくい。そのため、線描に適している。手も汚れにくい。
- ⑤ クレパスはオイルが多く使われており、柔らかく折れやすいため、面塗りに適している。脂分が多いので、手がべとつく感じがある。
- ⑥ 何よりも、形に違いがある。

イ 使用に際しての留意事項を知る。

- ① クレヨンは硬い(メーカーによってはやわらかめのものもある)ので、力いっぱいゴリゴリと描いても折れにくく、力の加減が難しい小さな子にはクレヨンのほうが適している。1歳ころから描き始める絵は、ひっかき傷のような線から始まる。この頃は、線の描きやすいクレヨンが適している。
- ② 幼稚園の年長から小学生ぐらいになると、線中心の絵が、様々な色を使って面を塗りつぶす絵になってくる。この頃には、伸びの良いクレパスが適している。クレヨンだと塗りつぶすのに時間がかかるが、クレパスなら手でほかすこともでき、色を混ぜ合わせて好きな色を生み出すこともできる。
- ③ 以上を踏まえ、いざ、子どもに与えようとするときに「どっちだったか」と迷うことがある。そんなときのために、次のように覚えておくとよい。

線 ヨン

面 パス

*線で描くときはクレヨン

*面を塗るときはクレパス

ウ 体験を通して違いをつかむ。

実際に、以下のようないろいろな方法を試しながら、遊びを通してその違いを体感的につかんでいった。

- ① 描く
直線・ギザギザ線・ぐるぐる線など、いろんな性質の線を描いてみる。どちら描きやすいか考えながら描いてみよう。
- ② 塗る
ぐるぐると塗り込んで、感触を確かめる。塗りやすいのは、ねばりがあるのはどちらかなど、考えながら塗っていく。
- ③ 混ぜる
色の上に違う色を重ねて、用紙の上で混ぜてみる。色によっても混ざり易さや混ざりにくさはあるが、

クレヨンとクレパスではどちらが混ざり易いかを考
えながら混ぜてみる。

④ 広げる

色を強めに塗った部分を、ティッシュを丸めてこ
すってみる。色の光が生まれるところを見て、ど
ちらが広げやすいか考える。

⑤ 重ねる

こすって広げた色と色を重ねてみる。直接重ねて
混ぜるよりも、淡い色と色がきれいに重なることに
気付く。

⑥ 型抜き（ステンシル）遊びをする

紙をくりぬいて穴をあけ、その穴の周りに色を付
けてこすり出す方法と、型紙の周辺に色を付けてこ
すり出す2種類の方法がある。

穴をどんどん広げながら、あるいは型紙をどん
どん小さくちぎりながら、形を変えた型の周りからこ
すり出した色を次々に重ねて形を描き出していく。

⑦ ひっかき（スクラッチ）遊びをする

いろいろな色を塗りこんで作った面を、黒一色で
塗りつぶす。その面を爪楊枝などのとがった用具で
ひっかいてみる。ひっかいた線の奥から、下の色の
面が透けて見えてくる。

(2) 考察

クレヨンやクレパスは、幼い頃に誰もが使った経験の
ある用具である。懐かしそうに笑みを浮かべながら手を
動かす様子が見られた。しかし、この2つに違いがある
などと考えたことのある学生は皆無である。2つの用具
の成り立ちや性質についての基本的な知識について解説
を聞いた後、指示に従って様々な技法を体験していった。

この用具体験は、具体的な形を描き出す活動ではない。
そのため、学生はためらうことなく技法を試し、その過
程が画用紙に残されていった。結果として表し出された
様々な色と形に、「意外ときれい」「初めてやったけどお
もしろい」などと声を上げながら進んでいった。

図画工作・美術が嫌いになった理由として、「何をどう
していいかわからないから」という記述が少なからず見
られた。子ども自らが発想することをねらった「自由に
表そう」との指導者の指示は、子ども各々のそれまでの
経験や体験と結びついてこそ有効な指導の手立てとなり
得るものであろう。それまでに苦手意識を抱いている子
どもへの「自由に」との発言は、決して子どもの心を解
き放ち、自己表現を後押しすることにはつながらなか
ったものと思われる。

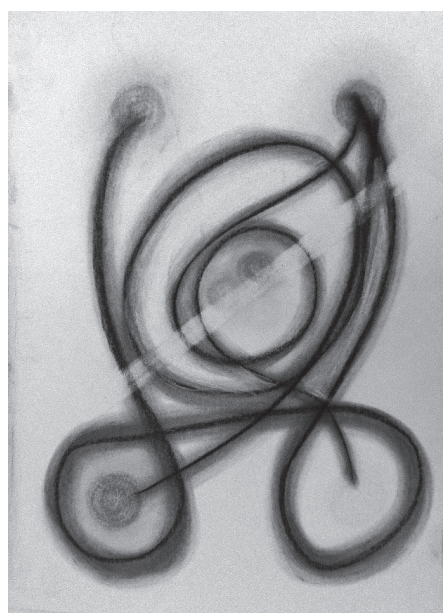
よく見られるこうした指導者の姿勢から振り返り、こ
の活動は、細かなステップを踏みながらの展開とした。
苦手意識をもつ学生は特に、それ以外の学生も迷うこと
なく活動に没頭することができたように思う。他者に後
れを取る心配はない、出来栄に優劣がつく恐れがない、
指示に基づいて手を動かせばそれなりに作品が出来上が

るといった活動は安心感を生み、苦手意識を抱える学生
も少しずつ心を開きながら活動を広げていったように思
う。それは、次なる活動への期待を表した振り返りの文
章からも感じられるものであった。

3 題材3「技法体験2」

～「コンテ・パステル」への発展～

クレヨンやクレパスとよく似た用具にコンテ・パステ
ルがある。このコンテ・パステルも絵画表現の際によく
使用されるため、同様に指導を進めた。クレヨンやクレ
パスよりも伸びがよく、形をあまり意識しないで済むほ
かしを主とした性質が強いため、学習の後半では自由制



作品2



作品3

作を採り入れた。表現した作品には自分なりのタイトルを付け、自らの思いをより明確に意識させるようにした。クレヨンやクレパスの体験から発展し、自己を表現することへの意欲が少しずつ高まってきたように感じる。

4 題材4「技法体験3」

～絵の具って面白い～

幼児期の造形表現活動においては、クレヨンやクレパスと同様に絵の具もよく使用される用具である。しかし、苦手意識が形成された理由の1つである「絵」を描く際に頻繁に用いられる用具でもある。したがって、絵の具を使うことに対する抵抗感は少なくない。併せて、準備や片付けが面倒、汚れるといった思いと相まって、絵の具嫌いも生まれている。クレヨン・クレパスと同様に、幼児の絵画指導に際しては、その抵抗感も除いておく必要がある。

(1) 学習過程

ア 用具を準備する。

① 筆洗、画板、雑巾、筆の役割について知る

図を示し、活動のしやすさをイメージしながら各用具を置く位置を定めるとともに、各用具の特徴について知る。

○ 筆洗

- ・ 水を入れる場所が3部屋又は4部屋あるものを選ぶ。
- ・ 水はそれぞれの部屋に70～80%程度たっぷりと入れる。
- ・ 右利きの場合は画板の右手に、左利きの場合は左手に置く。
- ・ 一番広い部屋が「洗濯場」として筆を最初に洗う場所とする。2番目に広い場所が「すすぎ場」として、洗った筆をすすいで汚れ水をしっかりと取り除く。残る部屋が「水飲み場」として、水加減を調整するための水として、常に濁りのない状態に保つ。

○ 筆

- ・ 筆洗の持ち手に開けられた穴に立てて置く。
- ・ 筆先を常に整えておく。

○ 雑巾

- ・ 使い古したタオルやガーゼを重ねて長方形に縫ったものを用意する。
- ・ 筆の水を調整するために使うので、筆洗の手前に折りたたんで置く。
- ・ 筆に含ませた水を掌に絞り、残った筆の水を雑巾で吸い取る。水気がなくなった筆を掌の水に浸けると、水が筆に吸い取られていく。このことから、筆の役割とそれを生かすための雑巾の重要な役割を知る。

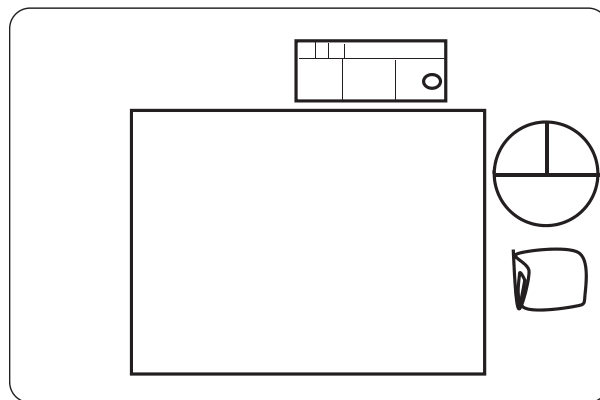


図6

○ パレット

- ・ 色がむやみに混ざらないように、色を出す部屋を固定する。
- ・ 色を混ぜる部屋（グラウンド）は、広いスペースを使う。
- ・ 絵具を出すときは、豆粒くらいずつ出す。
- ・ 絵の具チューブの口に絵の具を付けたまま蓋をしない。

イ 筆で線を描く。

① 直線、曲線、とがった線、太い線、細い線などの様々な性質の線を、いろいろな色を使って描く。

- ・ 描きながら、色を変えるときは筆洗いの仕方、水加減を調整するための雑巾の使い方などについて体感する。
- ・ 筆を洗う時には「ザブザブ」、水を少し加えるときは「チュッ」、しっかり水を加えるときは「チュー」、雑巾で水を吸い取るときは「ジュー」、しっかり吸い取るときは「ジュージュー」など、行為を音にして表すと子どもたちに伝わりやすいことを知らせ、基本的な理解を図る。

② 色の部屋から色を少しずつ取って、グラウンドで混ぜる。

- ・ 混ぜる2つの色を別々に小さな円状に溶かし、それを筆先で少しずつ取りながら色調整をしていく。
- ・ すべてを混ぜてしまうと、微妙な色の調整ができなくなることに気付かせる。
- ・ 色を混ぜた後のパレットには、ミッキーマウスの頭の部分のような溶き跡が残っていく。

③ 色を重ねる

- ・ 思いの色は、混ぜて色を作るだけでなく、重ねて作ることができる水彩絵の具の特色についてつかむ。
- ・ 濃い色の上に淡い色を重ねると、下の色が透けて、重なった部分の色が変わって見える。
- ・ 「今年着たい浴衣の柄」をイメージしながら思いのままに色を重ね、混色とは違う色の変化を楽しむ。

ウ 「吹き絵」をしてみよう

～サラサラの色からザブザブの色へ～

静物や風景などの形をとらえて表す絵の場合は、水彩絵の具の特色を生かした“サラサラ”な水加減が求められる。この水加減を幼児が調整することは難しく、指導者があらかじめ調整した共同絵の具を使用させることが多い。

一方で、絵の具の楽しさは、水をたっぷりと含ませた描き方にもある。

① 色を溶かす

- ・色の部屋から取った絵の具に、水をたっぷり加えて溶かす。パレットのグランドは、ザブザブの洪水状態である。

② 色水をストローで吹く

- ・その説いた絵の具をたっぷり筆に含ませて、画用紙の上に落とし水たまりをつくる。
- ・水たまりの部分をストローで吹いて、広げていく。
強く吹くと破裂したような模様が、優しく吹くと水たまりがコロコロと転がっていき、色跡が線を形作る。
- ・色を変えながら、思いのままに吹いていく。
- ・思いがけない色の形が次々と生まれ、夢中になって取り組む。

エ 「指絵の具」

～指をキャンバスにして～

ザブザブの色だけでなく、絵の具には濃い色の特徴もあることを経験させたい。ほとんど水を含ませずに、生の色のもつ面白さを感じる活動である。

① 生色を筆にとる

- ・筆先を使って、絵具のチューブから直接色を取る。

② 指先に描く

- ・その色を使って、自分の指に目や口を描いて顔にしていく。
- ・一つの顔ができたなら、次の指に違う顔を描いていく。
- ・指人形のように、指先で物語が生まれる。
- ・油分のある指に描くためには、思い切り水気を減らした絵の具を使う必要がある。この活動を通して、生の絵の具の性質に気付く。

オ デカルコマニー

～折りたたんだ画用紙の間に色を置いてみると～

① 折りたたんだ画用紙に色を置く

- ・画用紙を二つ折りにして、片面にいろいろな色をチューブから直接出して置いてみる。

② 色を画用紙で挟む

- ・それを、半面の画用紙ではさみ、しっかりと圧縮してみる。
- ・そおと画用紙を開いてみると…、思いがけない色の広がりの方が現れる。

③ 自分なりの色の置き方を工夫する

- ・この経験を生かして、意図した場所に絵の具を置いて圧縮してみる。なかなか思い通りには広がらない形に、色遊びの不思議さや楽しさを味わいながら活動を進めていく。

カ 後片付けをする

～水を大切にしながら片付けよう～

絵の具を使うことを嫌う理由の1つに、準備や片付けが大変だからというものがある。確かに、使う用具が多く、他の用具と比べると汚れの度合いが強い。そこで、片付け方を学ぶことにより、絵具への抵抗感を少しでも減らしていきたい。

(2) 考察

絵に対する抵抗を取り除くという目的から、本稿では主に描画材の体験を取り上げたが、工作における折る・切る・貼ることを主とした技法も様々に取り上げた。これらの経験は、描画経験と相まって表現の心を育てるものであろう。絵に表すことに抵抗を持つことは、即ち自己を外にさらけ出すという表現の有り様事態を否定する行動につながっていく。それは、心を開いて他者とつながるという、対人援助を主たる目的とする職「保育者」としての有り様にも、少なからず影響を与えるものと考えている。

実際に、用具を用いて手を動かし、手を動かすことによって現れる表現の軌跡を自ら確認すること、更にその表出されたものに優劣を付けられる恐れがないという安心感、これらを様々な活動を細かに積み重ねていくことにより、少しずつではあるが手の動きがスムーズになっていったように思える。

自己の抵抗を乗り越えるのは、目的に向かおうとする自己の心である。

5 題材5 「KIRIE de NAME」

～誰でもできる簡単切り絵～

我が国において「きりえ」という言葉が使われ始めたのは昭和40年代であり、その定義は現在でも明確になっていない。紙などを切って造形する方法は、中国を期限とするお守りや日本の神前での儀式用切り紙、更には着物などの染色用型紙などとして広く人々の生活の中で伝承されてきた。

筆者の小学生を対象にした造形表現指導経験においても、こうした切り絵の技法を取り入れて行った題材は少なくない。切った面に色セロファンを貼って光の透過効果を楽しむ「スタンドグラス」や、影絵で物語を描く「OHP劇場」などである。これらの製作過程において、自ずと集中に向かう子どもたちの姿を見るにつけ、切り絵の教育的効果の大きさを感じたものである。以下に、自ずと集中に向かう要素を挙げる。

- ① 下描きにより、できあがりの姿が明確に予測でき

る安心感。

- ② 色を排除する（基本的に白と黒）ことにより、協調される表現の思い。
- ③ 切って表すことにより、自ずとデフォルメされる形。これは、写真のように描かなければならないという思いからの脱却につながる。
- ④ 一心に手を動かす（切る）ことの心地よさ。
- ⑤ 紙が切られることにより、徐々に形が現れてくる期待感。
- ⑥ できあがりの姿が分かりやすいことにより、やり遂げたいという意識の強まり。

これらの教育的効果は、苦手意識を払拭する上において有効な手立てとなるのではないかと考えた。

しかし、切り絵を行う上で障害となるのは、下絵を完璧に仕上げる必要があることにある。通常の切り絵では、絵に対する不安感はぬぐえない。そこで、デザインの過程を可能な限りシンプルにし、自分にもできるという安心感をもたせるよう、指導の工夫を加えた。

(1) 学習過程

ア 名前をモチーフにしたデザインをする

- ① 作品と同サイズの下絵用の紙に、人筆で枠を描く。
- ② 枠に付けるように、自分の名前を書く。
 - ・漢字は避け、シンプルな形にできるひらがなやカタカナ、英語などの文字を使う。
 - ・通常の文字の概念にとらわれず、線を伸ばしたり曲げたりして、無理やり枠に付ける。
 - ・文字の概念を崩すために、「簡単に読めないこと」という課題を示す。
- ③ 書いた名前に肉付けをしてデザイン化する。
 - ・肉付けの仕方により、太い線、細い線、スーとした線、でこぼこした線など、思い通りの性質の線ができることを知らせる。
 - ・ここで、切る箇所のイメージを持たせる。
- ④ 遊びのデザインを付け加える。
 - ・全体を見ながら、付け加えたいと思う場所にお気に入りの簡単な形をシルエットにして付け加える。
 - ・画面全体に、変化が生まれる。
- ⑤ デザインをチェックする。
 - ・カッターナイフの刃を充てる箇所のイメージが明確に持っているか否かを、ていねいに確認する。

イ 下絵を作品用の黒い用紙と重ねて切る。

- ① 細かな部分から順に切り進める。
- ② 時々裏返して見ながら、できあがりのイメージを確認する。

ウ 台紙に貼って仕上げる。

- ① 切り終えた黒い用紙の裏に、スプレーのりを吹き付ける。
- ② 台紙のセンターに正確に貼れるように印をつけた用紙（見当紙）を使い、貼り重ねる。

エ 鑑賞をする。

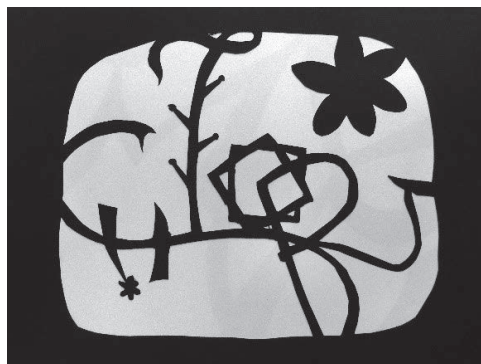
- ① 出来上がった全作品を前面に掲示し、見合う。
- ② 別日に、写真撮影した画像を投影し、作品を見て感じたことについて発表し合うとともに、一人一人の作品のもつよさについて解説する。

(2) 考察

全員の作品が並べられた黒板を見て、1単位時間で全員が作品を完成させることができたことに驚きの声が出る。それは、自分にもできたという安心感に加え、自らの予想を超えて生まれた形の思いがけない面白さに対する驚きの声でもある。1枚1枚の作品を見ながら学生は、わずかな数字のひらがなやカタカナからスタートするという共通の課題から生まれた作品が、それぞれすべて異なった輝きを放っていることに気付く。生み出されたそれぞれの線のもつ「繊細、きっぱり、柔らか、力強さ」などの性質、文字を変形させるために与えた「読みにくい」から始めたアイデアの面白さ、ささやかな「遊びの形」が醸し出す面白さやアクセントなど、白黒2色で彩られたそれぞれの作品から発せられる魅力を、確実に受け止めていたように感じる。その魅力は、一人ひとりの作品制作に向かうその時の意図や思いによって生み出されたことを感じている。それは、正に自他の個性を認識した瞬間と言えよう。さらに、ぬぐいがたい「他者との比較による優劣の意識」も、思いがけない自らの作品のよさに気付くとともに、指導者や友人からの賞賛の



作品 4



作品 5

言葉により、安心感のみならず、「自分もそんなに劣っているわけではない。自分だってできる」という、自己実現の喜びにつながっていったように思える。

Ⅳ ま と め

造形表現に対するあこがれをもつ人は多い。「○○のように描けたらいいだろうなあ」という思いは、誰もが抱く感情である。その一方で、○○のように描けない自分にも気づき、「自分はできない」というあきらめに近い苦手意識を抱いたまま成長する。その意識は、多くの場合が「他者との比較」による評価の有り様に起因するものと考えられる。一つの正解に向けて競い合い己を磨く「修練」によって発展してきた我が国のものづくりと、その時々産業界の求めに応じて変化してきた学校教育の歴史によって築かれてきた我が国の風土がある。そのすべてを否定するものではないが、一方で一起点からスタートして無限に広がっていく「拡散思考」を通して資質・能力を磨いていこうとする造形表現のねらいとは相いれない部分もある。こうした環境の中で育ってきた学生は、知らず知らずのうちに自らの中に潜むよさや可能性を否定し、「できない自分」を好むと好まざるに限らず受け入れることにより安定を図っていこうとすることになる。その結果として、自己肯定感は先進国の中で最も低いという我が国の子どもや若者の傾向³⁾が危惧される事態も生じている。

こうしたことから、本稿で取り上げた一連の取組では、「必ず全員ができ、自他の作品を上手いか下手かで捉えず、子どもになったつもりで思いのままに手を動かす」ことを主眼に進めてきた。それは、とりもなおさず、自らのもつよさや可能性に気付いてほしいという願いから

である。学生一人一人は、それぞれ異なる環境の中で性質や好み傾向など独自のものを形成しながら成長してきた。したがって、もてるよさや可能性もそれぞれ独自のものがある。本稿は、そのことに気付かせることが「苦手意識」の脱却に有用ではないかとの仮説に立つ実践研究である。「○○のようにしたい」との意識の中には、「今の自分よりもっとよくなりたい」という学生の心からの願いを感じるからである。

今回の一連の取組を終えて、学生たちは「苦手だったのが好きになった」「上手い下手を考えずにやっていたら、徐々に発想が湧くようになってきた」「自分なりに表現できるようになった」「楽しかった」との感想を寄せた。

一連の取組の中で学生が、「苦手な自分でもできる」「手を動かしていけば何か生まれる」「人と違っていい」ということに触れることができたならば、今後出会うであろう幼児に対して、主体性を大切に勇気をもって活動に向かうことができるよう「大丈夫、やっpegらん」の思いを伝えていくことが期待できる。それは、幼稚園教育要領「表現領域」のねらい・内容である「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性と表現する力を養い、創造性を豊かにする」に向かう活動を創り上げていく資質・能力の育成に寄与するものと考えている。

参 考 文 献

- 1) 文部省「小学校指導書 図画工作編」開隆堂出版 平成元年
- 2) 辻康秀著「よくわかるクレパス・クレヨン」サクラクレパス出版部 平成27年
- 3) 内閣府 令和元年(2019年)版「子ども・若者白書」2019年

Summary

We conduct a questionnaire to new students every year. According to it, many students dislike painting and art classes. Many respondents disliked it, especially in elementary school. Among them, the students who dislike painting stand out. I think many of the problems in modeling education are due to this weakness. Therefore, in this study, we examined the ideal lesson method to reduce the feeling of weakness through practice. This study is based on the idea that reducing awareness of weakness and enjoying the joy of expression leads to growth as a childcare worker in front of infants.